

1920年代のメルヴィル・リバイバル再考

西谷拓哉

1. メルヴィル・リバイバルへ

Herman Melville(1819-91)の『白鯨』(*Moby-Dick*, 1851)を「近代」、「アメリカ」という概念と重ねて論じるとき、注目すべき事柄の一つは1920年代のメルヴィル・リバイバルと呼ばれる現象である。いったんは忘れ去られた作家であったメルヴィルが、1920年代に英米(特にイギリス)の文学界、アカデミアで復活するのである。1920年代というまさに近代から現代に移ろうとする時期に、いったい『白鯨』の何が英米の知識人を惹きつけたのか。この経緯を探れば、『白鯨』を通して「近代」の問題点が浮かび上がってくるだろう。

『白鯨』、『ピエール』(*Pierre*, 1852)と、意欲作であったはずの小説が世に入れられず、メルヴィルは『信用詐欺師』(*The Confidence-Man*, 1857)で長篇小説の筆を折り、以降は短篇や詩作に転ずるが、次第にその文名は衰えていった。しかし、1880年代から1910年代にかけて、主にイギリスでマイナーな形でメルヴィルへの関心が見られるようになる。たとえば、80年代にはイギリス人のRobert BuchananやHenry S. Saltがメルヴィルに関する記事を書いている。また、メルヴィルの死去に伴い、1891から92年にかけて小説4作の新版が発行されたのを機に英米で再評価の動きが起こった。とはいえ、それらはエキゾチックでポピュラーな旅行記の作者という評価にすぎなかった。その中で、Archibald MacMeham, "The Best Sea Story Ever Written"(1899)などは『白鯨』の文学的価値を論じた最も早いものの一つである。

このように19世紀末からメルヴィル再評価の気運がなかったわけではないが、それが本格化するのには20世紀に入ってからである。その一つの理由は合衆国にとってある種の政治的意図を伴ったものであった。第一次世界大戦を経て合衆国がヨーロッパ諸国と伍して世界の中で大きな位置を占めようとするときに、アメリカ文化の成熟度を宣伝する一つの方途として「アメリカ文学史」の構築ないしは再発見を行なう必要があったのである。1917年に*Cambridge History of American Literature*が編纂されるが、その中でCarl Van Dorenがメルヴィルをアメリカ文学の古典的大作家として位置づける動きの口火を切る。この流れは1919年のメルヴィル生誕100年を経て、1921年出版のRaymond Weaverによる最初の評伝*Herman Melville: Mariner and Mystic* (New York: George H. Doran)に受け継がれていく。

しかし、メルヴィル・リバイバルの中心はイギリスであった。1922年にロンドンのコンスタブル社から16巻の全集 "Standard Edition" が出版される。さらに、D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (New York: Thomas Seltzer, 1923)所収のメルヴィル論、詩人としてのメルヴィルを評価したJohn Freeman, *Herman Melville* (London: Macmillan, 1926)、小説論の古典として名高いE. M. Forster, *Aspects of the Novel* (London: Edward Arnold, 1927)所収の『白鯨』論と続き、メルヴィルの評価は揺るぎないものとなる。

それにしても、1920年代に「復活」するのがなぜホーソンやポーではなくメルヴィルであり、しかもなぜイギリスで評価されるのか。それを理解するためには、メルヴィルの文学と、(1)モダニズム文学思潮との関連、(2)第一次世界大戦以降がもたらした精神的地殻変動や不安との結びつきを考慮する必要がある。

2. メルヴィルとモダニズム

英米文学におけるモダニズム運動は、19世紀以来のリアリズムとは異なる新しい芸術観や文学観を小説観を求めたが、『白鯨』に用いられている手法には、伝統的な首尾一貫した語りの破壊、断片的で非直線的な語り、口語と文語の混在、内的意識の表現、多様な語り手の混在による複数の視点の導入など、モダニズムと相通じるものが多く見られる。そのような小説手法の現代性が、モダニズム期にメルヴィルが再評価された理由の一つであろう。その意味でメルヴィルをプロト・モダニストと呼ぶことができる。

さらにモダニズム期には、近代から現代へと移行にともなって産業が高度に発展し、社会全体がますます機械化、合理化していくという流れの中で、社会から孤立し疎外される芸術家という一つのタイプが強調された。しかし、それは必ずしも否定的に受け取るべきものではなく、むしろ詩人、小説家に、時代相に警鐘を鳴らす予言者的な性質を与えることとなった。フォースターが『小説の諸相』の「予言」(Prophecy)の章で、ドストエフスキーとともにメルヴィルを論じているのはその証左の一つである。

モダニズム期の文学というと、機械化、断片化していく人間の生活とそれを反映するような断片的な文学形式が強調されることが多いが、この予言者という芸術家像に着目してみると、モダニズム文学思潮の根底にある人間性復活を願う志向が読み取れる。その一つの鍵は「自然」である。モダニズム文学の少なくとも一部には、自然によって、寸断された自己を再統合し、日常世界を「超越」しようという志向がある。たとえば、アメリカ文学においては、ヘミングウェイの『日はまた昇る』や『二つの心臓の大きな川』で、第一次世界大戦で肉体的、精神的に傷ついた主人公が川での鱒釣りによって回復していく様子が印象的に描かれている。このような自然への没入は一種の原始主義、あるいは神秘主義と呼べるものであり、ロマンティズムの精神とも通じるものである。モダニズム文学にはそのような意味でロマンティズム復興という側面がある。

自然との一体感は、イギリス・ロマン派のみならず、1830年代から60年代にかけてのアメリカにおけるロマンティズム文学運動である「アメリカン・ルネサンス」の中心的精神である。エマソンは「自然」("Nature," 1836)という論文の中で、自然を見つめていると自分が透明な眼球となって自己執着が消え、「普遍者」の流れが全身を駆けめぐり、自然に内在する神の霊と一体となるという体験を語った。このような神秘的瞬間はメルヴィルの『白鯨』にも至るところに見いだせる。たとえば、第35章「檣頭」で、高い檣頭から海を眺め続けている見張り、波のゆらぎに揺られて「無意識の夢想」に陥る(p.140。引用はノートン版、訳は概ね千石英世訳による)。

……恍惚に濡れるこのとき、きみのうちにすでに生命はなく、あるのはただ静かに揺れる船からつたわりくる生命のゆらぎのみ。船につたわるその生命は海のゆらぎからつたわりきたもの、そして、海につたわるその生命は神の見えざる本源に発する潮のゆらぎからつたわりきたもの。(p.140)

このように自己が溶け出して外界と一体化する感覚は、鯨脳油を絞り出す作業を扱った第94章「手絞り」でも描かれている。

握りしめ、揉みしだく、握りしめ、揉みしだく、午前中ずっとそれを繰り返していた。握りしめ、揉みしだいて、しまいには、おれ自身がそこに溶け出していくようだった。不思議な狂気に染

まっていっく自分を感じるのだ。(中略)さあ、しっかり皆で手を握り合い、皆で揉みしだき合おう。いや、自分自身を握りしめ自分自身を揉みしだいて互いのなかへ溢れ出よう、さあ、自分自身を揉みしだいて、我と彼との区別なく一緒に友愛の乳汁へ、親愛の鯨脳油へ溶け込もう。(pp.348-9)

3. ロレンスとメルヴィル

メルヴィル・リバイバルにおいて最も重要な役割を果たしたのがロレンスの『アメリカ古典文学研究』である。この書物の執筆経緯はおよそ次の通りである。

- ・1916 『白鯨』を読む。
- ・1917.8.30 J. B. Pinker宛の手紙「私は経済的見通しを何とかしようと思って、『アメリカ文学における超絶的要素』というエッセイを書いています。」
- ・1918-19 アメリカ文学に関するエッセイを雑誌 *English Review* に発表
- ・1919 イタリアへ
- ・1920 シシリーで『アメリカ古典文学研究』改稿作業
- ・1922 アメリカに到着。サンフランシスコを経て、ニューメキシコ州北部の山間地帯タオスに落ち着くが、すぐにそこでの生活に幻滅。滞在中に『研究』最終稿を完成。
- ・1923 出版
(『アメリカ古典文学研究』には、2種ないし3種の異稿がある。その一つはArmin Arnoldによって *The Symbolic Meaning* としてまとめられている。)

『アメリカ古典文学研究』はいわゆる学術的な「文学研究」ではなく、予言書的な性格を持った文明批判の書であって、執筆時期からもわかるように、ロレンスが第一次世界大戦という現実の戦争と、その前後の西欧近代文明に対して感じていた危機意識、およびそこから発する人間性復活の願いを、アメリカ文学の論考を通して熱っぽい口調で論じたものである。なかでもメルヴィルの『タイピー』と『白鯨』を論じた二つの章、およびホイットマンの章にその傾向が強く出ている。

ロレンスによれば、芸術の機能とはひとつの「モラル」を語ることである。それも「情念に満たされた暗黙のモラルティ」、あるいは、「理知よりは、むしろ血を変えるようなモラルティ」であるべきだという(p.180. 引用はペンギン版、訳は概ね酒本雅之訳による)。ところが、アメリカ人作家は「うそつき」(p.8)であって、自由、平等、デモクラシーといった理想的、観念的モラルにからめとられて「最も深い自己」(the deepest self, p.13)を見失っている。「最も深い自己」は、『アメリカ古典文学研究』の異遺版である『象徴の意味』では、「深い、腰椎の性的意識」(the deep, sacral-sexual consciousness, p.235)と述べられている。要するに、何ものにも抑制されない無意識的な欲望のことであり、それをロレンスは「あれ」(IT, p.13)と呼ぶ。ロレンスにとって芸術とは「あれ」に従うことである。ところが、アメリカ人作家は理知的なモラルと「あれ」の間で分裂している。ロレンスはそこにアメリカに代表される近代という時代の病根を見出すのである。

人間がその「最も深い自己」をつかめるとすれば、それは原初的自然においてである。しかし、アメリカ人はその自然を抑制してしまうか(フランクリン)、美化してしまうか(クレヴクール)、分析しつくしてしまうか(ポー)、逃げ出すか(『タイピー』のメルヴィル)するしかない。「タイピー」では、主人公は人間の世界を逃れ、南洋のマルケサス諸島に原始を求める。ロレンスはその主人公に、

疎外者としてのメルヴィルを見て、「海へ帰ってゆくヴァイキング」(p.134)と呼ぶ。この「ヴァイキング」は「人間の世界を受け入れることできない」、「人間の世界に属することもできない」(p.134)。しかし、結局、メルヴィルはその原始的世界から逃げ出してしまう。我々は怖くてもはや原初的な自然に戻るなどではしない。そして、ついには原初的な自然を破壊しようと追って、追って、追いまくり、ついにはみずから破滅する(『白鯨』のメルヴィル)しかない。

このように、アメリカ人作家が体現している近代人の運命は、『白鯨』のエイハブに集約されている。第135章で、エイハブはモービー・ディックを追いつめながら次のように言う。『アメリカ古典文学研究』にはこの箇所は引用されていないが、エイハブの独白は近代人の拡大する自我意識を旗幟鮮明に謳いあげたものである。

……いまこそ感ずる、悲苦において偉大なるもの、それがおれだったのだと。……すべてをただ破壊するだけで、征服することなきもの、鯨よ、おれは最後の最後まで貴様にこの手でみかかって行こうぞ。地獄の芯までくだりおりて、おれは貴様を刺し貫こうぞ。(p.468)

ロレンスは、モービー・ディックを「白人種の最も深い部分に宿る血の息吹」、「われわれにそなわるもっとも深い血の性」(p.169)と解釈する。つまり、「最も深い自己」あるいは「あれ」に相当する存在である。それが「上部意識と観念的意志」に支配された偏執狂エイハブに狩り立てられ、「われわれの血に宿る意識が、寄生虫さながらの理知的、あるいは観念的意識によって崩されていく」(p.169)。このように、ロレンスはエイハブとモービー・ディックの戦いをいわば 理知の意識 と 血の意識 という二元論で捉えているのである。

メルヴィルはこの両極に引き裂かれている。『タイピー』において見られたように原初的な自然との一体化にあこがれながらも、それへの回帰を果たし得ず、『白鯨』においては反転して原初的な自然の破壊に向かい、ついには自らの破滅に至る。この経緯に、ロレンスは西欧近代人の運命を読み取り、それを「宿命」(fatality)、あるいは「破滅」(doom)と呼ぶのである。

恐ろしい宿命。

宿命。

破滅だ。

破滅だ。破滅だ。破滅だ。アメリカのまっくらな木立のなかでは、何かが破滅をささやいているように思える。破滅をだ。

何の破滅をだろう。

われわれの白い時代の破滅をだ。(pp.168-9)

この一節にはロレンスのアメリカ批判、近代批判が最も端的な形で現れている。fatality, doomという言葉の反復は、劇的で、予言的で、強迫的ではある。しかし、それがあまりにもヒステリックに響くとすれば、それはロレンス自身がメルヴィルと同じく 理知の意識 と 血の意識 に引き裂かれ、その分裂をどう処理しようもなく焦燥していたからであろう。第一次世界大戦の殺戮と、その後の合理化と機械化に支配された時代相に対して怒りと不安を感じていたとしても、だからといって原初的な自然に立ち戻り、それと一体化できるのかどうか。ニューメキシコ州タオスの自然の中での生活にもすぐにロレンスは幻滅するし、現に『タイピー』を論じた章の中でも、「われわれはあともどりでき

ない」(p.145)とはっきり述べている。このような自己矛盾をロレンスは抱えていた。おそらく他のモダニズム期のイギリス作家たちもその矛盾を共有していたであろう。少なくとも、『インドへの道』(1924)を書いたE・M・フォスターははっきり意識していたに違いない。モービー・ディック＝原初的自然 対 エイハブ＝近代的合理精神 というロレンスの『白鯨』解釈は極めて単純明快である。しかし、その露骨なまでに潔い単純さの中に、メルヴィルと『白鯨』が孕む分裂とロレンスの自己矛盾との激しい反応、共振を読み取ることができる。「近代」と対峙しようとするロレンスにとって、メルヴィルとの出会いは一つの必然であった。

[文献]

- Arnold, Armin. *D. H. Lawrence and America*. London: The Linden Press, 1958.
- Bryant, John, ed. *A Companion to Melville Studies*. NY: Greenwood Press, 1986.
- Cavitch, David. *D. H. Lawrence and The New World*. NY: Oxford University Press, 1969.
- Conrad, Peter. *Imagining America*. London: Routledge and Kegan Paul, 1980.
- Cowan, James C. *D. H. Lawrence's American Journey: A Study in Literature and Myth*. Cleveland: The Press of Case Western Reserve University, 1970.
- Forster, E. M. *Aspects of the Novel*. 1927; Harmondsworth: Penguin Books, 1962. (中野康司訳『小説の諸相』みすず書房、1994)
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*. 1923; NY: Penguin Books, 1977. (酒本雅之訳「アメリカ古典文学研究」、『D・H・ロレンス』(研究社、1974)所収)
- Lawrence, D. H. (Armin Arnold, ed.) *The Symbolic Meaning: The Uncollected Versions of Studies in Classic American Literature*. London: Centaur Press, 1961. (海野厚志訳『象徴の意味』慶應義塾大学法学会、1972)
- Melville, Herman. *Moby-Dick, or, The Whale*. 1851; NY: W. W. Norton, 1967. (千石英世訳『白鯨』講談社文芸文庫、2000)
- Parker, Hershel, ed. *The Recognition of Herman Melville*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1967.
- Riegel, O. W. "The Anatomy of Melville's Fame." *American Literature*, Vol. 3 (1931)
- Swigg, Richard. *Lawrence, Hardy, and American Literature*. London: Oxford University Press, 1972.
- 亀井俊介「ロレンスとアメリカ」、『D・H・ロレンス』(研究社、1974)所収
- 杉浦銀作『メルヴィル 破滅への航海者』(冬樹社、1981)
- 寺田健比古『神の沈黙 ハーマン・メルヴィルの本質と作品』(筑摩書房、1968)
- 野島秀勝『メルヴィルと西欧近代』、『孤独の遠近法』(南雲堂、1994)所収
- 野田 明「ロレンスの『白鯨』論」(英文學春秋、第11号、2002)
- 八木敏雄「D・H・ロレンス『古典アメリカ文学研究』研究序」、八木敏雄編『アメリカ!』(研究社、2001)所収